

## 呼びかけ語と対聞き手指向性

東出, 朋  
九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程

<https://hdl.handle.net/2324/1928660>

---

出版情報 : The Joint Journal of the National Universities in Kyushu. Education and Humanities.  
4 (1-2), pp.No.4-, 2017-03. 九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会リポジトリ部会  
バージョン :  
権利関係 :

# 呼びかけ語と対聞き手指向性

東出 朋<sup>1</sup>

## The Vocative and Orientedness Toward Hearer

Tomo HIGASHIDE

本論文は、自然談話における呼びかけ語の使用のあり方は、聞き手に対する話し手の意識—対聞き手指向性—に対応すると考え、呼びかけ語の多様な明示的使用の統一的説明を目指した。特に談話に特徴的な呼びかけ語として、重ね用法 (e.g. お父さんあんた) と対称人称詞 (あんた等) のフィラー的な挿入について指摘し、対聞き手指向性というスケールの強弱によって解説した。

キーワード：呼びかけ語, 対聞き手指向性, 談話

### 1. 序論

本稿は、自然談話における呼びかけ語の使用を、聞き手に対する話し手の意識—対聞き手指向性—を反映するものと捉えた上で、呼びかけ語の多様な明示的使用を統一的に説明することが目的である。

鈴木 (1973) は、西欧語の人称詞 (及び人称代名詞) という区分が日本語には適さないことを指摘し、自称詞は話し手が自分を表す言葉、対称詞は話し手が相手を表す言葉 (呼格的用法及び代名詞的用法)、そして他称詞は対話の中に登場する第三者を指す言葉という三分類を提唱した。この分類は、日本語の呼称研究において現在まで広く支持されている。「呼びかけ語」については、鈴木 (1973) のいうところの「対称詞」という観点から研究されてきた。

多数の聞き手の中から一人を特定するために対象を呼ぶ、または少し離れた場所に位置する対象を呼ぶ場合の呼びかけの必然性は理解しやすい。しかし、呼びかける必要がない状況、既に聞き手が特定されている状況で出現する呼びかけ語の意味、その機能についての疑問は、様々に説明されてきた。まず2節では、いまだ統一的見解がない呼びかけ語について先行研究を概観する。そしてそこに見られる根本的な問題点を指摘し、本稿での定義を確認する。3節では本稿が分析に援用する理論的枠組みを示す。4節ではデータを提示し、5節では対聞き手指向性という観点から実例分析を行う。6節では対聞き手指向性という観点から呼びかけ語を統一的に説明し、最後に本稿のまとめを記す。

### 2. 呼びかけ語の定義

呼びかけ語の定義について、先行研究では揺れが見られる。本節では、呼びかけ語の定義とその対象についての先行研究を概観し (2.1 節)、先行研究では説明できない実例を挙げながら定義の難しさを示した後、本稿での定義を定める (2.2 節)。

## 2.1 呼びかけ語の認定に関する先行研究

英語や中国語、ロシア語等、述部と文法的に対応する主語が存在する言語では、呼びかけ語(句)が命題の外側にあることが確実に判断できる。しかし日本語では呼びかけ語(対称詞)が聞き手の行為に言及する場合、問題となる形式が題目語への省略なのか、それとも述部とは関連がない呼びかけ語なのか判断することが難しい。以下の指摘を見られたい。

(前略) 対称詞の2用法のどちらに分類するのか判断不可能な例が少なくないことも明らかになってきた。例えば、「田島先生、どんな色が好きですか」(井上 2003: 25), 「やっぱり、あなた、まだ、あれ分かっていないんだわ」(小林 1997: 128) のような例である。 (高橋 2005: 134)

つまり、当該の名詞句が、「田島先生はどんな色が好きか」「あなたはまだあれについて分かっていない」という文においてハが省略された形式、つまり文内の一要素であるのか、呼びかけ語なのか判断しがたく、過去の先行研究では混乱が見られることを述べている。この指摘に代表されるように、呼びかけ語の先行研究では様々な用語 (address of terms, 呼称, 呼びかけ, 対称詞等) が用いられ、呼びかけ語の定義について意見の統一をみない。本節では、問題となる語について、意味的な観点から呼びかけ語かハまたはガ格なのかを議論した先行研究 (2.1.1 節), 統語的な観点からの呼びかけ語とハの近接性に関する先行研究 (2.1.2 節), そして呼びかけ語と述部の関係を分析した先行研究 (2.1.3 節) を概観した上で、呼びかけ語の認定における問題点を指摘する (2.1.4 節)。

### 2.1.1 呼びかけ語とハヤガとの関係に関する先行研究

無助詞研究の初期の研究である丹羽 (1989) は、無助詞を主題や格、そして語順から詳細に検討している。そして、「Ø」は主題を表す文と近似的であるとして「君 Ø (は) どうするつもり？」(p.40) という例を挙げる。

丸山 (1995) は話しことばにおける無助詞格成分の格を、述語の結合価情報と照合して認定すると同時に、無助詞格の主題性について論じた。そこでは、動詞から離れて文頭に近くなると主題性を帯び、助詞ハのついたものに似てくる、また主題性が高くなると格の認定が難しくなるものも現れると述べた。「ハは本来大きな結合を担い、ガ(ヲ)は小さな結合を担うが、無形はその両方が可能で(中略)、大きな結合は、呼びかけに連続する」(p.378) として、「あんた泣いてんのね。」という例を挙げた。

野田 (1996) は話しことばの無助詞を取り上げた中で、主題性の無助詞と非主題性の無助詞を区別した。主題性の無助詞とは、「俺が関口と別れたら、おまえ Φ 嬉しいか？」(p.268) において、ハがつくはずなのについていない「おまえ」を指し、このような成分は主題の成分と同じように基本的には文頭におかれ、文を主題の成分とそれ以外の部分に大きく二分するという。それに対し非

主題性の無助詞の成分とは、「お腹Φ、痛い」(同上)における「お腹」など、書き言葉においてガ(やヲ、二、へ)がつくはずなのについていない成分を指し、基本的には述語の直前にあり、すぐ後ろの述語と強く結びついているという。

無助詞の呼びかけ語について触れた山田・中川(1996)もある。彼らは「兄さん、今帰ったの?」「姉ちゃん、ちょっと疲れてんじゃない?」(p.85)という例文を挙げ、この二文の解釈について、後続部との関係があるので呼びかけとは異なる、と考えるもの(長谷川1993)を紹介しつつ、文字情報だけでは判別できない、と判断を保留にした。

荻宿(2013)は近年のハダカ名詞に関わる研究を概観し、「無助詞」研究の現状と課題を述べ、今までの先行研究からある程度定説となってきた知見を四点にまとめた。

(1)

- a. 助詞がない形式が現れる格はガとヲと「二の一部」である。
- b. 話し手や聞き手を表す名詞、現場指示の指示詞が使われた名詞など現場にあるものを表す名詞が主題の場合、「無助詞」となる。
- c. bの場合、ハの対比、ガ(またはその他の格助詞)の排他的意味を表さないために「無助詞」となる。
- d. 新たな話題を提示する場合、「無助詞」となる。(荻宿2013:157の引用者によるまとめ)

(1b, d)は特に呼びかけ語と密接に関係する。なぜなら、聞き手を指す名詞が主題となる場合、また新たな話題として提示される場合に無助詞として現れるということは、その名詞は呼びかけ語とパラディグマチックに現れる要素であることを示しているからである。

題目文についての総合的な研究を行った丹羽(2006)は、無助詞の特徴の一つとして現場的性格を挙げる。そして、現場で発せられる「(山田さんに会って)山田さん。どこへ行っていたの?」という文について、「無助詞は、形態的には呼びかけ表現と等しい。次の文が、「山田さん」への呼びかけ文+(潜在題目を持つ)疑問文であるか、「山田さん」を無助詞題目とする疑問文かは連続的で、ポーズの置き方にも左右される」(p.299)と考えた。

「あんた泣いてんのね」(丸山1995)、「俺が関口と別れたら、おまえΦ嬉しいか?」(野田1996)、「兄さん、今帰ったの?」(山田・中川1996)、そして「山田さん。どこへ行っていたの?」(丹羽2006)それぞれの例文において呼びかけ語か無助詞格か半断しかねている語は、いずれもそれぞれに係る述部の主体となっている。これらの例文においてハヤガを挿入することは出来ない。格の観点から見るとハヤガと並列的関係にあるゼロ格(無助詞格)であるが、それと同時に談話の観点からは確かに聞き手を「呼んで」おり、「呼びかけ語」であるとも言える。以上の先行研究からは、呼びかけ語について考える上で格の観点のみではこれ以上説明がつかないことが分かる。

## 2.1.2 呼びかけ語とハの近接性

呼びかけ語と題目語ハの本質的な近接性を指摘する研究もある。堀川（2010）は「題目語」のハに「呼びかけ」性を見る。行為要求の文（命令文）「君は先に行け」「熱のある人は帰ってください」において、ハで示される語「君」「熱のある人」は「命令相手」であり、そのハを「呼びかけ」機能と考える。堀川（2010）は、宮地（1963）が「呼びかけ表現」を「コミュニケーションそのものに関する表現意図」、他の文表現一般を「コミュニケーションの内容に関する表現意図」を持つと区別したことを踏まえて、「ある言語表現を誰に向かって伝えたいのか、という聞き手を指定する部分と、伝達内容そのものの部分とは言語機能としてまったく別種のもの、全く別次元のもの」（同上: 23）と言う。その上で、「君」「熱のある人」は、「命令にあたってその命令を差し向ける相手を特に指定し、行為を要求する相手に、その発話に注目してもらい機能を果たす部分」（同上: 23）であるから、「呼びかけ」であると考えた。つまり、「大本君、会計係を担当してくれ」における「大本君」は言語機能の観点から呼びかけ語であり、上述の二例における「君」「熱のある人」と同じ機能を果たしているということである。

また、呼びかけのうちハの付加が不可能なのは、呼びかけ相手が発話の現場においてあらかじめ特定化されており、事実上呼びかけ相手以外の聞き手は考慮されていない、つまり対比的状況は全く意識されていない場合 (1) であると言う。それに対し、ハの付加が可能な場合として、対比の色合いを帯びる場合 (2)、また、不特定多数の中から条件に合う特定の人を選び出してその人に向けて要求する場合 (3) を挙げている<sup>2</sup>。

- (1) ベニー、おれと結婚してくれ。（\*ベニーはおれと結婚してくれ）
- (2) やる気のない者は去れ。
- (3) お降りの方はこのボタンを押してください。<sup>3</sup>

メイナード（2000: 167）は、「呼びかけと提題は、中心となる物や人に焦点化することを可能にする光を差し込むことで、焦点化プロセスの手助けをする言語のストラテジーという共通点を持つ」という。

前原（2000）は、「呼びかけ」を仁田（1997）による「未展開文」（一語文、独立語文）の下位分類である「言語行為保持型：言語行為の基本たる対話行為の発生・維持に関わるもの」とし、「呼びかけ」の解釈は後続発話の発話・伝達モダリティに関わると考えて、呼びかけの要件を三つ挙げた。

- (4)
  - a. 名詞句の指示する人物が、発話相手として話し手の念頭になければならない。
  - b. 後続の発話とともに、相手となるべき人物に対して（向かって）発せらなければならない。



視点で分析した。具体的には、「あんた」を述語との関係、「は」の付加の是非、そして命題との関わりによってAからDの四つの型に分類した。そして、「あんた」の項性の強弱は連続体であり、それと平行して命題との関連性が弱から強へ、つまり呼びかけの要素が強まるという相関関係があると述べた。以下は「あんた」の分類である。

#### (5) 「あんた」の分類

A型：述語の項である。「は」を付加しても意味は殆ど変わらないが、「は」がないことによって、文の構成要素というよりむしろ文の外に位置しているように感じられる。「は」では見られなかった「呼びかけ」の気持ちが現れてくる。

B型：述語の項ではない。ただ、完全に文の外にあるのではなく、間接項として文に取り込まれている。「は」の付加は可能である。

C型：述語の項ではない。「は」の付加は不可能である。完全に文の外に位置する。程度強調「ほんと」、驚き「なんと」の意味を持つ、一種の文副詞のような機能、文の内容全体を修飾するモーダル的な意味を持つ。

D型：述語の項ではない。「は」の付加が不可能である。文全体に対して修飾していない。純粋に呼びかけの項である。 (林・水口・小川 2005 の引用者によるまとめ)

林・水口・小川 (2005) が呼びかけ語を述語との項との関係から整理しその連続性を指摘した点は、非常に優れていると考える。また、「あんた」の音程的特長をピッチ曲線で観察することによって、述語の項として発話する際は独立したイントネーションユニットを作っていないが、項ではない場合には前後のポーズとピッチ変化によって一つのイントネーションユニットを作っていることも示した。つまり、音声面からも、AからDの分類の正当性を裏付けたと言える。

林・水口・小川 (2005) は本稿と同様に自然談話を扱ってはいるものの、その分類において本稿で補いたい点がある。それは自然談話における述語の絶対性に関係している。自然談話では述語が必ず現れるわけではなく、また話し手は言い間違えたり言いよんだり、ましてや途中で止めたりして、述語がいつどのような形で現れるかは事後的にしか分からない(次節参照)。発話冒頭及び冒頭付近で呼びかけ語が発せられた場合、それが聞き手に述語の項としていつ解釈されるかはもちろん不明であり、結果的に解釈可能であるかも判断できない。述語による分類はあくまで必要条件であって、十分条件とは言えないだろう。したがって、本稿では述語に完全に依存する呼びかけ語の判断を保留にしたい。

#### 2.14 呼びかけ語の認定に関する先行研究のまとめと問題点の指摘

本節では、呼びかけ語の認定に関係する先行研究を概観した。まず呼びかけ語(句)と題目や主題を表すハや主格を表すガとの関係、及び無助詞との関係、また呼びかけ語とハの連続性、そして

機能としての近接性、最後に呼びかけ語を述語との関係からのみ判断することの不適切さについて指摘した。

呼びかけ語をハヤガと関係づけて分析する姿勢と、呼びかけ語を述語と関連付ける姿勢は、呼びかけ語がいわゆる「文」の中にどのように位置づけられるか、という統語的観点からの分析という点において同類である。上述の先行研究は全てこの類である。ただ、呼びかけ語の統語的説明も重要であるが、呼びかけ語は必ず聞き手のいるコミュニケーションで用いられることを鑑みると、「文」ではなく「コミュニケーション」の観点から捉える必要があるだろう。実際のコミュニケーションにおいて、聞き手が自分を聞き手として位置づけていようがまいが、話し手が「聞き手と呼んでいる」のが無助詞で出現する対称詞であり、このような語は「呼びかけ語」と考えることができるのではないだろうか(3.2節参照)。「聞き手と呼ぶ」にも程度差があり、遠くに位置した人に気づいてもらうための「呼ぶ」行為から、すでに聞き手として当該談話で設定されているにもかかわらず「呼ぶ」場合もある。この「程度差」こそが、本稿の分析の概念「対聞き手指向性」(3.2節参照)の程度差であると言える。

## 2.2 呼びかけ語の認定と本稿における定義

前節での整理から分かる通り、呼びかけ語の定義を定めることは非常に困難である。本節では、実例を観察した上で、本稿で扱う呼びかけ語を定義する。

(6)

伊野 俺のこと買ってくれんの嬉しいけど、先生俺、ニセモンだもん<sup>(18)</sup><sup>4</sup>

(7)

美羽 お兄ちゃん、お父さん、行っちゃうよ

勇人 忙しい<sup>(19)</sup>

ここで、「先生」と「お兄ちゃん」はなぜ呼びかけ語と分かるのか。なぜ、何らかの助詞の省略ではないと分かるのか。対称詞で呼びかけられたことで、聞き手の意識は自分に向かう。(6)では「先生」と発せられた時点で、聞き手は自分のこと、もしくは自分に向かって言われていると認識する。続いて「俺ニセモンだもん」と発せられて、「俺(発話者:伊野)は(医者として)偽物である」という内容を認識する。「先生」が呼びかけ語であるということは、後続する発話を聞いて初めて理解できる。(7)では「お兄ちゃん」と呼ばれた後に「お父さんが行く」と発せられる。「お兄ちゃん」と「お父さん、行っちゃうよ」が統語的かつ意味的に明らかに断絶されている。

呼びかけ語そのものと後続発話が統語的かつ意味的關係性を全く持たなければ、明らかに呼びかけ語と認定できる。しかし、そうでない場合も多い。



(8)

2910 [名字(07A)]さん, めし行こうよ.

2911 うーん. 〈間 15 秒〉<sup>(8-2)</sup>

(9)

フミ おかしゃん, リコンしても, おとしゃんとまた会えるの? <sup>(20)</sup>

(8) は, ハの付加によって対比の意味が生じる可能性がある. (9) はハヤガの付加, また言い次第で解釈が変わる. 「お母さんが離婚しても, 私はお父さんとまた会えるのか」, 「お母さん, お母さんが離婚しても, 私はお父さんとまた会えるのか」の二つの解釈が可能であろう.<sup>5</sup>

(10)

玲美 そう. 別にいいのよ, 今のままでも. あなた, どっかに, 家庭は遠くにありて思うもの, そして悲しく歌うもの, って書いてたわよね. いいのよ, 遠くで思っていてくれれば <sup>(19)</sup>

(10) の発話は, ハが省略され「あなたは～～と書いていた」とも解釈することは可能である. しかし, 「あなた (動作主)」とその述語が離れている. 聞き手は, ただ呼びかけられただけなのか (つまり呼びかけ語なのか), 自分が何らかの動きの動作主なのか, しばらく後に発せられる述部を聞くまで判断できない. 先に発せられた語と述語が時間的に離れているので, 「あなた」が用いられた時点では, 聞き手はただ後続発話が自分に向けられていることだけを理解するだろう. また, 話し手は「あなた」を発した後, 述部を発話途中で変更したり, 別の話者に遮られたりして, 結局最後まで言わないこともある.

(11)

村長 ちょっと止まれ! お前<sub>1</sub>, どうしたんだそれ

滋 ん? 拾った

村長 先生に会ったのか?

滋 ん?

村長 先生...お前<sub>2</sub>, 先生どうしたんだ! なんだこれ, 何でこんなもの! <sup>(18)</sup>

(11) における「お前<sub>1</sub>」は, 「お前はそれをどうしたんだ」「お前, それはどうしたんだ」という二つの解釈可能である. また「お前<sub>2</sub>」は, 「お前<sub>2</sub>」と「先生どうしたんだ」が断絶しているため「お前<sub>2</sub>」を呼びかけ語と認定することが可能だろう.

(12)

- F1 わかめ美味しい?↑ 食べた?↑  
 D1 うん, 食べた, 食べた.  
 F1 あんた, 筍煮たかったけど, 今, 胃がちよっと具合悪いから. (4:139)

(12) の発話内容を事後的に観察した場合、「私は筍を煮たかったが、あんたは／が今胃の具合が悪いから (やめておいた)」であると考えられるが、F1 は談話を進めるにあたり「あんた」を先に言ってしまう。この「あんた」は呼びかけ語であるのか、さらに言えばこの「あんた」を話し手がどのようなつもりで発したのか、それは、観察者はおろか話し手にとってすら判然としないであろう。このような例も、発話のその瞬間に話し手は聞き手の注意を新たに獲得するだけであり、また聞き手は自分が呼ばれたことを理解するのみである。(10) や (12) の例から、述語との関係も重要だが、話し手がいかに談話を展開していくかは事後的にしか理解できないということが明確にわかる。

以上のように、呼びかけ語の定義を定めるのは容易ではない。したがって、本稿では、とりあえず鈴木 (1973) のいう対称詞の呼格的用法のうち、助詞の伴わないものを全て呼びかけ語とみなして分析の対象とする。

#### (13) 呼びかけ語の定義

鈴木 (1973) のいう対称詞の呼格的用法のうち、助詞の伴わないもの全て。

助詞が伴わないもの全てとした理由は、呼びかけるという行為が極めて話しことばで特徴的な発話行為であり、話し言葉においては実は助詞がない形が無標ではないか、といういくつかの先行研究に同意するからである。例えば山田・中川 (1995) は、「無助詞がデフォルトであるという立場から、助詞が用いられる場合について考察した」(p.38)。またハドソン遠藤・近藤・榊原 (2005) は日常会話に現れる主題、主語及び目的語の助詞の有無について調査した。そこでハドソン遠藤らは「無助詞句は助詞の「省略」や「脱落」によるのではなく、それこそが本来の形であり、有助詞句は助詞の「付加」によるもの」(p.25-26) と考え、無助詞を「無標」とする理由も検討した。2.1 節で取り上げた多くの無助詞研究の基本的立場は、始めにハヤガありきで、それを前提とした上で無助詞形式が呼びかけ語と解釈される可能性に言及したものであった。しかし本稿はそのような見方ではなく、当該の形式の出現は「聞き手を呼ぶ」という行為を前提としたものであることを提案したい。「呼ぶ」行為が実際のコミュニケーションに顕著であり、また無助詞が話し言葉における特徴であるなら、無助詞で聞き手を呼ぶ語を「呼びかけ語」として検討することも可能なのではないだろうか。また、このような新たな切り口が、逆に無助詞研究に貢献する可能性もある。この点は今後も検討を続けなければならない。

(6) ~ (12) で見たように、呼びかけ語の認定度は異なるため、便宜的に三種類に分類する。(6) や (7) のように、統語的、意味的に呼びかけ語であると確実に判断できるものを I 類、ハヤガの省略

と混同する恐れが低い文として、命令・依頼 ～て（ください）、勧誘の形 ～しよう（8）、禁止の形 ～するな、等をⅡ類とする。これらの文型では、もし発話者がハヤガで表現されるようなニュアンスを出したい場合、助詞を省略せずに言うはずであろうからである。同様のことは（6）～（12）でも言えるが、命令や禁止に比べると助詞の省略の必然性が明らかに異なり、呼びかけ語の認定が揺れるためⅢ類とする。

尚、本稿では、主に発話の冒頭及び冒頭付近で発せられる呼びかけ語を分析の対象とする。呼びかけ語は発話の自由な位置に挿入できるが、東出（2015）によると発話冒頭及び冒頭付近で用いられるのが全体の六割強であることから、まずはこの位置に関して考察を進める。この位置での呼びかけ語に関して、その考えうる種類は次の六種類である。

（14）

- |                                |              |
|--------------------------------|--------------|
| A) <u>お父さん</u> , ゴミ出してきてよ.     | 対称名詞一つ       |
| B) <u>あんた</u> , ゴミ出してきてよ.      | 対称人称詞一つ      |
| C) <u>お父さんお父さん</u> , ゴミ出してきてよ. | 対称名詞二つ       |
| D) <u>あんたあんた</u> , ゴミ出してきてよ.   | 対称人称詞二つ      |
| E) <u>お父さんあんた</u> , ゴミ出してきてよ.  | 対称名詞 + 対称人称詞 |
| F) <u>あんたお父さん</u> , ゴミ出してきてよ.  | 対称人称詞 + 対称名詞 |

（筆者作例）

呼びかけ語に関して考える際に重要な点は、ポーズの有無であろう。たとえば、E)「お父さんあんた、ゴミ出してきてよ」の場合、「お父さん」と「あんた」の間に明確なポーズがある場合は、それぞれ独立した発話と考えてもよいだろう。本稿で取り上げるのは、発話としておよそ一続きの連続性を持つと受け取ることができる「お父さんあんた」のタイプである。

### 3. 関連先行研究概観

本節では、呼びかけ語の性質や明示的使用に関する先行研究を概観し、そのあと本稿で用いる概念の説明を行う。

#### 3.1 呼びかけ語の直示性に関する先行研究

話し手と聞き手は発話現場に直接結びついており、直示性を持つ。呼びかけ語は聞き手に言及する語であり、指示語コソアや「わたし」「あなた」などと性質が同じである。鈴木（2009）は、このような直示性を持つ語が理解される順序として、まずそれを発する発話者に注意が向き、その後指示対象が判明することによると言う。例えば、話し手の言う「それ」の指示対象は、聞き手はまず話し手を見て（1）、その後その文脈に依存して、「それ」がモノなのか以前に言及された事態なのか理解（2）される。鈴木（2009）は対称人称詞の直示性について次のように言う。

誰かにくあなた>と言われた人は、その発声によって喚起された注意をまず言葉を発した人に向けます。そしてその人の目線や態度などで相手の指示行為の目標は自分だ、自分のことを言っているのだと理解するのです。つまり、この人の注意は初めは相手に向かい、それが方向を反転して自分に戻ってくるという一種の回帰行動を示すものと言えます。(鈴木 2009: 191, 下線引用者)

このようにして、呼びかけ語の対象(聞き手)は、呼ばれたことでまず話し手へ意識が向かい(1)、同時に指示対象が自分であることを理解(2)する。

田窪(1997)は、人称詞として用いることができる名詞の種類を固有名詞・定記述のタイプ(e.g. 田中君, お父さん)と人称名詞(e.g. わたし, おまえ)のタイプに分け、その性質について次のように述べた。

固有名詞・定記述は、その談話領域ですでに値がわりあてられており(つまり、誰を指すかがきまっている)、話し手、聞き手という対話の役割がそれに加わるだけである。これに対して人称名詞は、基本的に直示的な語であり、対話の役割だけが指定されている指標辞である。これはいわば語用論的変数のようなもので、話し手、聞き手という対話場面の役割により、その値(誰をさすか)が割り当てられる。(中略) 人称名詞が直示行為により指示対象を決めているのに対し、固有名詞や定記述が、記述により指示対象を決めている(後略)。(田窪 1997: 17, 下線引用者)

話し手が固有名詞や定記述を発した場合、当然その値となる対象は注意を喚起される。それに対して人称名詞の場合、当該談話において「一種の回帰行動」を経て注意が喚起される。

本稿では呼びかけ語を、田窪(1997)の人称表現の分類に従い、固有名詞・定記述のタイプ(e.g. 田中君, お父さん)と人称名詞(e.g. わたし, おまえ)のタイプの二つに分け、前者を「対称名詞」、後者を「対称人称詞」と呼ぶことにする。

#### (15) 直示性から見た呼びかけ語の二分類

対称名詞：聞き手を表す固有名詞や定記述の語。例えば「田中君」「お父さん」「社長」など。

対称人称詞：聞き手を表す代名詞。例えば「あんた」「おまえ」「きみ」など。

### 3.2 呼びかけ語の明示的使用に関する先行研究

対称詞の注意喚起機能は3.1節で述べた通りである。しかし自然談話では常に聞き手の注意を喚起する必要はなく、また実際対称詞の使用が少ないことが指摘されており(小林 1997)、対称詞を明示しないのは無標であると考えられることができるだろう。対称詞非明示が無標であるとしたら、わ

ざわざ聞き手を明示する場合、つまり呼びかけ語を用いる場合にはなんらかの機能や効果があると考えられる。

文脈上回避されうる対称詞があえて明示的に使用される場合の説明として、小林（2001）は排他的指示機能があると考えた。日本語の自然談話では対称詞の出現がきわめて少ない（小林1997のデータでは発話総数の1.20%）という事実から、その使用について何らかの抑制的要素が働いているとした。また対称代名詞（「おまえ」「あなた」等）については、「相手を、他の人でなく面前の相手を指しているのだと、いわば排他的に取り立てて強く指示するような文例において対称代名詞が出現していた」（小林2001: 67）という。無助詞について考察した荻宿（2014）は、述語との関係性で主体と見なせる（助詞を伴わない）名詞に限った上で、明示せずともわかる主体をあえて明示する対称詞の説明として、程度強調や話し手の心情を表したりする副詞的用法（「ほんと」「まったく」「まさか」と感動詞的用法（「えっ」）があることを置換テストによって指摘した。前原（2000）は、「呼びかけ語」の前後で談話の内容転換が見られることから、呼びかけ語の挿入は談話冒頭であるかのような効果を目指した話し手の意図の表れである、と捉えた。林・水口・小川（2005）は、分析対象を自然談話における「あんた」に限定し、述語との項関係を分類して分析した。その結果、「あんた」と命題との関わりは連続的に大～小（無）へと変化し、それに平行して呼びかけ度が小～大へと高まるとした。

以上の四つの意見は、呼びかけ語を明示的に使用した場合の機能や効果に注目している。しかしここには、呼びかけ語を話し手が聞き手を「呼ぶ」という「行為」の観点で不足している。2.1.4で述べた通り、聞き手を「呼ぶ」という行為には、その「呼ぶ」度にあたって程度差がある。遠くに位置し、かつ話し手に一切気づいていない人を呼んで聞き手に設定する「呼ぶ」行為もあれば、すでに聞き手として設定されているにもかかわらずあえて「呼ぶ」場合もある。いずれの場合も、話し手が聞き手に呼びかけた、呼びかけ語を発したという事実から、話し手の聞き手に向かう意識が言語化されたと考えることができる。このような、話し手の聞き手に向かう意識について尾上（1975）は「対他的意志」と述べた。本稿ではこの術語を援用して、この意識について「対聞き手指向性」と呼ぶ。

#### (16) 対聞き手指向性：聞き手に向かう話し手の意識

「対聞き手指向性」の有無とその強弱、つまり「対聞き手指向性」の程度差という観点によって、日本語において聞き手言及が必須ではなく言及せずとも会話の進行が可能である、また既に聞き手との会話が成立しているにもかかわらずあえて聞き手に呼びかけることがあるという二点を統一的に説明することができるだろう。呼びかけ語を用いない「対聞き手指向性」ゼロの発話から、「対聞き手指向性」が明示化される場合でも様々な呼びかけ語の用いられ方によってその強弱に程度差がある。このことを図式化したものが図3（次頁）である。

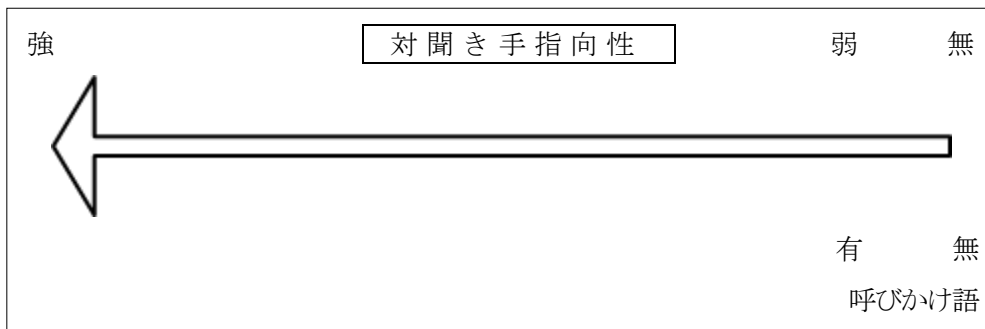


図3. 対聞き手指向性の明示化

### 3.3 関連先行研究のまとめと本稿の課題の確認

前節では、呼びかけ語の直示性を確認したのち、なぜ呼びかけ語（または対称詞）が明示的に使用されるのかという疑問に対して次のような見解が存在することをまとめた。基本的な「注意喚起機能」の他に、「排他的指示機能」（小林 2001）、「副詞的・感動詞的用法」（荻宿 2014）、「談話冒頭のような効果を生む」（前原 2000）、「呼びかけ語にはその呼びかけ度に相対性がある」（林・水口・小川 2005）という意見がある。機能や用法の観点から様々な説明が試みられているが、呼びかけ語を包括的に説明するには至っていない。

本稿では、聞き手に対する話し手の意識を「対聞き手指向性」と名付け、その有無と強弱によって自然談話における様々な呼びかけ語の明示的使用を統一的に説明することを目的とする。

## 4. データ

会話データは、日本人母語話者の自然談話を録音、文字化した資料である。自然談話における呼びかけ語は、自然談話で多数観察されるフィラーやあいづちとは、その出現頻度という点で大きく異なる。したがって、談話参加者の属性、談話の場、話題などを統一・制限すると呼びかけ語が一切観察されないこともある。このような理由から、日本人母語話者同士（二人以上、電話も含む）の自然談話を文字化した既存の資料を活用することにした。また、自然談話として採集が困難な「非難」「叱責」「喧嘩」「愛情表出」などの場面を参考とするために、映画のシナリオもデータとすることにした。データは表1の通りである（添付資料参照）。

各データ制作者はそれぞれの文字化ルールに従っているため、本稿で扱う全てのデータに共通した文字化ルールはない。句読点の打ち方、発話割り込み、あいづち、笑い、ポーズ、イントネーションの記述方法とその正確性など、様々な点で統一されていない。また、元データ（音声や映像）には必ずしもアクセスできない。分析の際にはこの点に注意しなければならない。

## 5. 分析

本節では、2 節で挙げた A) ~ F) のタイプの呼びかけ語の実例を観察し、対聞き手指向性という観点からそれぞれの違いを分析する。

### 5.1 A) 「対称名詞一つ」と B) 「対称人称詞一つ」

A) 「対称名詞一つ」の例として、次の (17) ~ (19) を挙げる。

(17)

4391 あ、でも先生(せんせ)、ワックスがけて特別清掃区域でしょ↑、廊下と。

4392 教室は今日じゃなくて。(8-1)(I 類)<sup>6</sup>

(18)

1561 それは、[名字]先生たのまなきや、写真はー。<笑い>

1562 ねえ。(8-1)(II 類)

(19)

Q なんかにおに会ったときに Q さん最近ニュース見てますかあ一見た見たとか言って(9:10-15)

(III 類)

B) 「対称人称詞一つ」の例として (20) ~ (22) の例を挙げる。

(20)

千昭 あれ、おまえ自転車は？ 乗れよ、後ろ (11)(I 類)

(21)

23 そしたら 80 代の前半と 80 代の後半の人でお風呂入れましたが行ったら体見てねお婆あちやんが おまえ休んどけて大きい人が来てくれたけえな安心じゃけえ言うて?? 言いましたわな(10:8)(II 類)

(22)

12B うちのおやじがめっちゃめっちゃ反対したんですけどね。

12B 「おまえ大変だぞ、高校だけはでとけ」みたいなことを言われてて、(7:123)(III 類)

まず対称人称詞の使用制限について述べる。一般的に対称詞として多用されるのは固有名詞、及び親族名称、階層名称 (e.g. 部長、課長等) や職業名といった定記述のタイプである (田窪 1997)。

それに対して、対称人称詞を用いることができる関係及び状況は非常に限定されている。関係としては、非常に親密な関係、例えば夫婦や友人間、または（限られてはいるが）先生が生徒に、上司が部下にといった目上から目下に対して、場面（状況）としてはフォーマル場面よりは雑談場面、罵倒やケンカ、命令等の状況が想定される。小林（1997）によると、職場の会話データでは発話文総数に対して対称詞の使用は1.20%、さらに対称人称詞の使用は0.23%である。ここから考えると（また母語話者の直観からしても）、対称人称詞の使用の有標性は明らかである。

次に、対称人称詞の対聞き手指向性について考える。A) 「対称名詞一つ」は、聞き手個人を指す定記述のタイプの対称詞である。語そのものが、聞き手を一義的に指示している。それに対して「お前」「あなた」「あんた」という対称人称詞は、鈴木（2009）の指摘の通り（3.1節参照）、聞き手の意識はまず話し手に向かい（1）、それと同時に指示対象が自分（引用節であれば自分でない誰か）であることが理解される（2）。聞き手個人を意味している対称名詞とは異なり、対称人称詞は、指示対象が自分（または第三者である誰か）であることを理解するために二重の作業（鈴木2009の言う回帰行動）が必要とされると言える。であるから、話し手、聞き手双方にとって、対称人称詞の選択はより負担を強いる操作である。

対称人称詞の選択自体の制限、及び認知手順の二重性という二つの要因から、B) 「対称人称詞一つ」は、A) 「対称名詞一つ」より対聞き手指向性が強いと考えたい。

## 5.2 C) 「対称名詞二つ」とD) 「対称人称詞二つ」

C) 「対称名詞二つ」の例は、次の(23)(24)である。

(23)

伊野 ヤスエさん、ヤスエさん！あのねえ、何でも好きなもの食べていいのよ！パンでもお寿司でも、美味しいと思うものを食べたらいいの  
ヤスエ 先生、紅茶を飲んでではダメですか？ (18)(III類)

(24)

Q だっ わたしは 〆〆とか言ったのは どうなるのよー あなた (笑う)  
P あーっ (笑う)  
Q まあ 別に 悪口 言ったわけじゃないから いいけど  
P Q Q 最近は 誰が好き  
Q へーー^ なに 人系↑  
P 当たり前じゃん 猿じゃないよ (笑う)  
Q (笑う) 人系 (笑う) (9:9-17)(III類)

D) 「対称人称詞二つ」の例は、今回のデータでは一件しか観察されなかった。



(25)

201 一人で、さみしい。

202 ヒョーツ。

203 ふふ。

204 なんだ、いまの、まゆげは。

205 おまえね、おまえね。

206 うん。

207 その女の発想はね。

208 おれね、おれ、そういう風に話されると、おれもね、#####

209 あからさまに、いっちゃいけない。(8-1)(III 類)

(23) ~ (25) の例はいずれも、聞き手が発話を受容するのが困難な状況にある（他の方向を向いている、他の話題を熱心に続けている、他のことを考えている等）場合に、聞き手の注意を強力に喚起するために二度繰り返していると考えられる。つまり、A) 「対称名詞一つ」及びB) 「対称人称詞一つ」をより強化したもので、対聞き手指向性がA) 及びB) より強いものとする。またC) とD) の対聞き手指向性は、5.1 節でA) とB) について述べたのと同様に、D) の方がより強いといえるだろう。

### 5.3 E) 「対称名詞 + 対称人称詞」

本節では、対称名詞と対称人称詞が二つ連続する用法を観察する。

(26)

安藤 比留間くん。もう...いい？

比留間 まだ百円分揉みきってねー。安藤お前もっと太れよ。オレは宗方みたいなでかいおっばい  
がいいんだ

安藤 僕じゃ...

峯 比留間、こいつは男で、宗方は女だ。(14)(II 類)

(27)

組合長 千代さん！

組合幹部1 あんた、今更ハワイに寝返る気か？

組合幹部2 婦人会の会長だっぺよ！

組合長 千代さんあんた、気いふれたのか？(13)(III 類)

(28)

09B それで、その人を介抱じゃないですけど、「大丈夫ですか」言って部屋まで送ってあげて、帰ったら兄さんらに「大輔おまえ何しててん遅いやんけ」って言われて、「いや僕実はいま、エレベーターでなんかこうこうこうでね」言って (7:107)(III 類)

(26) 「安藤お前もっと太れよ」について考えてみよう。この発話をこの文脈において考える時にまず注目すべきは、「安藤もっと太れよ」や「お前もっと太れよ」ではなく、「安藤おまえもっと太れよ」であるという事実である。このような、対称名詞と対称人称詞を重ねる用法を、「重ね用法」と名付ける。重ね用法は、「安藤」や「お前」以上に、話し手の聞き手に対する感情、この場合「もっと太れよ」という「命令の感情」を前面にする。(27) は、話し手の聞き手に対する感情として「非難の感情」が明示的に伝達される。純粹に「あなたは気がふれたのか」と尋ねているわけではない。「千代さんは(我々の味方であり)裏切るわけがない」という話し手の推察が前提としてある。(28) も同様に、「(もっと早く戻ってくると思っていたのに)遅いじゃないか」という非難が伝達される。

感情の伝達無しに対称名詞 + 対称人称詞の重ね用法は用いられない。そして、この感情の表出はパラ言語的表現(音調や強弱)の有無とは関係ない。たとえば、次の文を考えてみよう。

(29)

- a. 千代さん、気いふれたのか?
- b. あんた、気いふれたのか?
- c. 千代さんあんた、気いふれたのか? (27) からの作例

(29a) 及び (29b) は、ある特徴的な音調を伴えば非難の気持ちを表現することは可能である。そしてもちろん、そのような感情を伴わない純粹な疑問文として発話することも可能である。それに対して (29c) の場合、何らの音調を伴わずに発せられた場合でも、聞き手に対して発話者が何らかの感情を抱いていることが伝達される。言い換えると、(29a) 及び (29b) は中立の表現が可能だが、(29c) の重ね用法の場合、中立の表現にはならず、感情無しで発することが不可能である。ここで言う感情とは、聞き手に対する何らかの感情である。感情は、その呼びかけ語が発せられる文脈に基づいている。ただ聞き手を指向しているのではなく、聞き手に対する感情が発話内容に付加的に伝達されるという点から、E) 「対称名詞 + 対称人称詞」の重ね用法は、A) ~ D) より対聞き手指向性が強いと判断する。話し手は重ね用法という語彙的手段によって聞き手に対する何らかの感情を明示的に伝達し、聞き手にその発話を解釈する際に有標に解釈するように要請する。

#### 5.4 F) 「対称人称詞 + 対称名詞」

この呼びかけ語の組み合わせは、データには一件も見当たらなかった。この語順が適切でないの

は、母語話者の直観からしても分かる。では、なぜF)「あんたお父さん、ゴミ出してきてよ」が非文なのだろうか。その説明として二点挙げたい。

- |   |             |           |
|---|-------------|-----------|
| B) <u>あんた</u> 、ゴミ出してきてよ。                    | 対称人称詞一つ     |           |
| D) <u>お父さんあんた</u> 、ゴミ出してきてよ。                | 対称詞 + 対称人称詞 |           |
| F) * <u>あんたお父さん</u> 、ゴミ出してきてよ。 <sup>7</sup> | 対称人称詞 + 対称詞 | ((14) 再掲) |

一番目の説明は、余剰性 (redundancy) の観点である。B)「あんた」は、現場に存在する「あんた」、つまり具体的人物 (ここでは父) を指す直示的表現である。D)「お父さんあんた」の「あんた」の「あんた」は、「お父さん」が指すものと同一のものを直示している。B) と D) は聞き手に問題なく理解できる。しかしE) の「あんたお父さん」は、「あんた」によって直示的に具体的事物を指し示したにも関わらず、続けて定記述の対称名詞によって同一物を指し示す。「あんた」が発話現場に密着してすでに二重の作業を経て理解された (鈴木 2009) にもかかわらず、その作業より直接的な指示である定記述の語を加えるのは、不必要または余剰である。その余剰性が不自然であると捉えられるため非文となると考えることができる。

二番目の説明として、束縛条件Dによる制約が挙げられるだろう。田窪 (1997) は、文内の名詞間に関わる同一指示 (co-reference) の統語的制約として、束縛条件D《指示的名詞は、より指示性の少ない名詞を先行詞としてはいけない》を用いた。

(30)

- |                        |             |
|------------------------|-------------|
| a. 田中課長は課長の家にみんなを招待した。 | (田中課長 = 課長) |
| b. 課長は田中課長の家にみんなを招待した。 | (田中課長 ≠ 課長) |

同一文内だけでなく、呼びかけも同様であると言う。

- |                        |             |
|------------------------|-------------|
| c. 田中課長、課長はこの案件に賛成ですか。 | (田中課長 = 課長) |
| d. 田中君、君はこの案件に賛成かね。    | (田中君 = 君)   |
| e. 課長、田中課長はこの案件に賛成ですか。 | (課長 ≠ 田中課長) |
| f. 君、田中課長はこの案件に賛成かね。   | (君 ≠ 田中課長)  |
- (a ~ f は田窪 1997: 22-23 の例)

この束縛条件Dという制約から、「お父さんあんた、ゴミ出してきてよ」も説明可能だろう。「あんたお父さん」では、指示性の少ない名詞が先行詞として立っているため、非文になる。

## 5.5 G) 「その他」

本節では、A) ~ F) で挙げる呼びかけ語とは異質としか考えられないものを取り上げる。例文(31) ~ (34) では対称人称詞「あんた」が用いられているが、これらは後続の命題と何ら文法的関わりを持たない。また、目の前にいる「あんた」そのものに呼びかけているとも言えず、もはやこの文脈では「あんた」の実質的意味は感じられない。むしろ、発話のリズムを整えたり、または自分で自分に合いの手を入れるかのごとく挿入されているように感じられる。なお、このような「あんた」の使用は老人の語りに多く見られる。

(31)

712 ほいで失語症右の手足がマヒ来たということはアノよっぽどの覚悟をしてもらわないかん  
のん特に動かないようなマヒんなったら

713 これあんた奥さん女の人はねつらいよ (10:8)(I 類)

(32)

W050 逢限はあんた 8月2日に何じゃが防衛庁長官がアノ視察に来るんじゃ

V056 えーたどこに来る多摩 (10:29)(I 類)

(33)

16 抱え上げたりコお風呂入れるときにはエおあんたおまえは休んどけやーちゅうてきのう  
も行ったきのうおとついでですけどね行ったんですよお風呂夜ね (10:8)(I 類)

(34)

244 お姉さんまた帰ってきたよ一言うて帰ってくる本人はうれしいけど来られる方はあんた  
夜も寝不足で料理作ったりいろいろせにやいかん (10:8)(I 類)

発話中に話し手が何度も「あんた」を繰り返せば、ある種の冗長性が発生し、聞き手には執拗に感じられることが予想される。しかし話し手は「あんた」によって聞き手に接近し、聞き手と一緒に談話を共有する姿勢を見せる。これらの例文では、聞き手「あんた」の外延的意味 (denotative meaning) は薄れ、聞き手を「呼ぶ」より、発話の気持ちよさや聞き手との一体感を重視している。

この点から、この「あんた」の用法は対聞き手指向性が弱いと考える。

今回のデータでは「あんた」以外の語が現れなかった。しかしこのような用法は、老人の語り以外に、落語や漫談等の話芸において出現するだろうと推測する。次は落語に見られた例である。

(35) ぽつっと出てきた、雲。『ああえれえ雲が来たような』、みるみるうちに真ッ黒。墨を流したよう……そのうちに風が変るてえと疾風<sup>はびこ</sup>てえやつだア、ぽつりつと降ってきた雨はま

るで細引だア。こいつがおめえ盆をひつくる返したよう、ざあアッてえとおめえ一寸先ア聞だア。一生懸命なつて舟を操つてみたが、いくら腕が達者でもよ、乗ってる奴が大勢で舟が小せえときてるんだ、操りきれぬわけのものじゃアねえ。横波をひとつ喰うてえと（ぽんと手を打って転覆する仕草）舟アがばりと……ええ、ひつくる返った……（声をひそめ）ひつくる返っちゃッ……あつしゃア夢中ンなつて板子一枚抱いて、飛込んだまでは知ってるんだがあとは夢中。我に帰ってみると知らねえ顔ばかり並んでるんだ。

8

この場面では、語り手が語りの中の登場人物としての聞き手を呼ぶために「おめえ」を発しているのではないことは明白である。雨が盆をひっくり返したように打ち、一寸先が闇である、という話のクライマックスで、プロの語り手は、臨場感を出し、語りの中の登場人物としての聞き手への接近を示すと同時に、その効果として聴衆の注意を引くべく意図的に用いているのであろう。

日常の会話においてこのような長広舌をふるうこと、つまり発話権を長く保持する機会は少ないだろう。「きみ」や「あなた」、「おまえ」という対称人称詞でも同様の使われ方をするか、ほかのデータにも当たらなければならず、この点は今後の課題としたい。

なお、「あんた」という語がその実質的な意味を失い終助詞（間投助詞）化したものに、山口（周防）方言の「のんた」<sup>9</sup>、佐賀方言の「ばなた」<sup>10</sup>（志津田 1972）等がある。これはそれぞれ「の一、あんた」「は／ばん、あなた」が短縮したもので、感動や驚きの強調、念押し、親愛の表出、などの説明が一般的である。今では老人にしか用いられず、衰退しつつあるという。以下はあくまで推察である。発話末で「あんた」を発することでは、話し手が聞き手とその発話を共有したい気持ちを表現することができる。「今日のフレンチ、美味しかったわね、あなた。」と言えば、妻が夫と感情を共有しようとしていることが分かる。もちろん念押しや感動などの表出ではあるが、それは話し手が聞き手とそのような感情を共有しようという前提の上に表出される感情である。しかし、時を経て「あなた」の実質的な意味が漂白化し、他の助詞と結合し、次第に別の助詞へと変化した。

本稿では発話冒頭及び冒頭付近の呼びかけ語を対象としたのであって、「のんた」「ばなた」等は発話末の対称人称詞の変化であるが、このような例からも分かるように、「あんた」や「お前」という対称人称詞の挿入は、聞き手との一体感を作り出したい、聞き手と共有したいという話し手の願望の現れであると考えられる。

## 6. 考察

前節までで観察した呼びかけ語を対聞き手指向性の強弱でまとめると、図4（次頁）のように表すことができる。

(36)

- |                                 |              |
|---------------------------------|--------------|
| A) <u>お父さん</u> , ゴミ出してきてよ.      | 対称名詞一つ       |
| B) <u>あんた</u> , ゴミ出してきてよ.       | 対称人称詞一つ      |
| C) <u>お父さんお父さん</u> , ゴミ出してきてよ.  | 対称名詞二つ       |
| D) <u>あんたあんた</u> , ゴミ出してきてよ.    | 対称人称詞二つ      |
| E) <u>お父さんあんた</u> , ゴミ出してきてよ.   | 対称名詞 + 対称人称詞 |
| F) * <u>あんたお父さん</u> , ゴミ出してきてよ. | 対称人称詞 + 対称名詞 |
| G) その他                          |              |

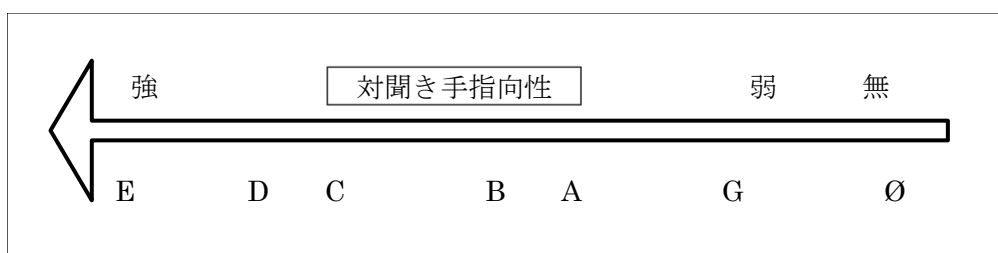


図4. 対聞き手指向性の強弱

聞き手に適切に情報を伝達するために注意を喚起したり (A と B), 聞き手が発話を受容するのが困難な状況にある (C と D) 際には, 当然聞き手に呼びかける必要がある. また E) お父さんあんた (対称名詞 + 対称人称詞) は, 話し手の聞き手に対する感情の伝達効果がある. 「あんた」には, 聞き手を指し示すのではなく, 聞き手との感情・発話の共有を目指して挿入されるようなもの (G) もある. その場合, 具体的な存在としての聞き手という意識は弱い.

ここで, なぜ呼びかけるのかという点について考えたい. A) ~ D) の例では, 呼びかけ語は聞き手そのものを指向しており, 呼びかけ語の後には伝達すべきことがらが続く. また「千代さんあんた, 気いふれたのか?」では, 重ね用法によって話し手の聞き手に対する「非難の感情」が明示的に伝達される. そもそも話し手は, もともとこの感情を抱いており, それが重ね用法という形で言語化されたわけである. 「気いふれたのか?」が後続することによって, 「非難の感情」の対象がその命題にこそ含まれていることが表現される. つまり, 話し手は何らかの感情を抱いており, それを伝達するために有標な呼びかけ語を用いて相手の注意を喚起し, 後続の命題を発する.

本稿では発話冒頭及び冒頭付近の呼びかけ語を観察したが, 対聞き手指向性という切り口を用いることによって, 発話において比較的自由に現れえる呼びかけ語について, 発話末の呼びかけ語や単独発話としての呼びかけ語も統一的に説明が可能になると考える. 聞き手を「呼ぶ」または聞き手に「呼びかける」という行為は, どのような状況であれ, 話し手が聞き手の注意を喚起することになる. 単独発話の場合, 対聞き手指向性が前面に出てきている. 何かを伝えるために「呼ぶ」必要があったり, または「呼ぶ」ことが何らかの発話行為の代替となる場合もある<sup>11</sup>. それに対し, 5.5 節で触れたような発話中及び発話末の呼びかけ語は, 聞き手を「呼ぶ」意識自体は背景へと薄

れ、感情の共有や場の共有を目指す、より談話的・対人的な呼びかけ語であると言える。「ばんた」のように対称人称詞が終助詞化したものは、もはや「聞き手を呼ぶ」という意識は消失し、完全に対人的モダリティのマーカ―と変化したと推測できる。この点は今後の課題とする。

## 7. まとめ

本稿は、対聞き手指向性という視点から呼びかけ語の様々な種類を分析した。これまでの呼びかけ語研究に対する本稿の貢献を五点挙げたい。まず、従来の先行研究では当該の名詞句について意味的及び統語的な観点からの説明がなされてきたが、それでは実際の談話における様々な現れ方が説明できないと考えたため、本稿では対聞き手指向性という切り口で説明を試みた。二点目として、呼びかけ語の定義について、構文的視点のみでなく実際の談話の柔軟さを踏まえて捉えようとした。三点目に、呼びかけ語は一つまたは二つが連続して用いられ、対聞き手指向性という点で連続的に強弱を持つ。四点目には、談話に見られる呼びかけ語の用法として重ね用法（対称詞 + 対称人称詞, e.g. お父さんあんた）を指摘し、この形式は対聞き手指向性が最も強く、何らかの感情を伝達する。最後に、「あんた」や「おまえ」という対称人称詞が単独で用いられる場合、対聞き手指向性が弱く、調子を整えたり、聞き手との一体感を生む効果がある。

今後の課題を三点挙げたい。まず一点目は、呼びかけ語の定義について精査する必要性があることである。日本語は、統語的に呼びかけ語が判断できる英語や中国語、ロシア語と異なり、また自然談話特有の無助詞現象と切り離せないため、自然談話における日本語の呼びかけ語について定義を検討し続けなければならない。二点目として、本稿は主に発話冒頭の呼びかけ語を考察の対象としたが、単独発話、発話末の呼びかけ語、そして終助詞化した形式についても考察する必要がある。三点目として、本稿では「その他」として分類した「あんた」のタイプの幅広いデータを収集し、考察することである。

## 注

- 1 九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程3年
- 2 堀川 (2010) はこれらの例を「ハを付加することが可能」(p.24) と表現するが、むしろこれらは「ハを省略できないもの」であることには注意する必要がある。
- 3 (1) ~ (3) は、堀川 (2010: 24) より引用。
- 4 表1 (添付資料) にしたがって、左から資料番号 (と必要に応じてページ数) を示す。
- 5 (8) (9) の例をはじめとして、呼びかけ語はハヤガの付加によって幾つかの解釈が可能であることが分かる。しかし、本稿では解釈の余地については検討しない。
- 6 2.2 節で示した呼びかけ語の認定度Ⅰ類 ~ Ⅲ類を括弧で記す。
- 7 「あんた」と「お父さん」の間に明らかなポーズがあり、別の独立した発話と捉えることができる場合、このF) には当たらないと考える。
- 8 『八代目春風亭柳枝全集』(1977) 弘文出版、八代目春風亭柳枝による「大山詣り」速記録からの引用。 <http://www.asahi-net.or.jp/~ee4y-nsn/rakugo/HRS0104.htm> [2016年3月アクセス]
- 9 「のんた」という助詞に関する資料は非常に少ない。用例やその他類似のバリエーションなどの詳細は、以下のインターネットページを参照されたい。 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E5%8F%A3%E5%BC%81>, <http://www.ysn21.jp/furusato/yomoyama/text29.html> [共に2016年3月アクセス] 尚、「ばい」「ばいた」「ばんた」「かнта」等も、終助詞と「あんた」「おまい」が結合してできた助詞と言われており、バリエーションを持つ。ネイティブインフォーマントにも確認した。 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BD%90%E8%B3%80%E5%BC%81> [2016年3月アクセス]
- 10 志津田 (1972: 162-164, 167-168) によると、係助詞の「ハ」「バン」に「アナタ」がついて「バナタ」、「バンタ」になり、また「オマエ」「オマイ」がついて「バマイ」となった。「バナタ」は至極改まった場合、「バンタ」及び「バマイ」は「バン」「バイ」より改まった場合に使われるという。また、疑問、質問等の終助詞「カ」とも同様の派生をし、「カンタ」「カマイ」となる。
- 11 東出 (2015) で少し触れたことであるが、語用論的解釈が必要とされる呼びかけ語を指す。アニメ『となりのトトロ』の冒頭、勘太が引越作業中の草壁家におはぎを届けに来た帰りのシーンである。勘太「おまえんち、おっばけやーしき！」勘太の祖母「かнтаー！」このシーンで、勘太の祖母は孫をただ呼んでいるわけではない。「こら！なんてひどいこと言ってるの！」という怒りを伝達している。このような呼びかけ語は、ある種の発話行為の代替行為であると言える (Lansisalmi, 1997)。



## 参考文献

- 尾上圭介 (1975) 「呼びかけの実現—言表の対他的意志の分類—」 東京大学国語国文学会 (編) 『国語と国文学』 52-12.
- 荻宿紀子 (2013) 「『無助詞』研究の現状と課題」 学術研究. 人文科学・社会科学編 = Academic studies and scientific research (62). 147-162.
- 荻宿紀子 (2014) 「談話における対称詞のいわゆる『無助詞』現象—『呼びかけ』の周辺—」 小林賢次・小林千草 (編) 『日本語史の新視点と現代日本語』 187-205. 勉誠出版.
- 小林幸江 (1996) 「『同格』をめぐって」 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 22. 1-13.
- 小林美恵子 (1997) 「自称・対称詞は中性化するか」 現代日本語研究会 (編) 『女性のことば・職場編』 113-137. ひつじ書房.
- 小林美恵子 (2001) 「排他的指示機能から見た対称詞」 『ことば』 22. 67-77. 現代日本語研究会.
- 志津田藤四郎 (1972) 『佐賀の方言 下巻 総説編』 佐賀新聞社.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店.
- 鈴木孝夫 (2009) 『日本語教のすすめ』 新潮社.
- 高橋圭子 (2005) 「対称詞研究のダイナミズム—ポライトネスおよび指標性の観点から—」 『言語情報科学』 3. 129-143. 東京大学.
- 田窪行則 (1997) 「日本語の人称表現」 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』 13-44. くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』 くろしお出版.
- 丹羽哲也 (1989) 「無助詞格の機能—主題と格と語順—」 『国語国文』 58 (10). 38-57. 中央図書出版社.
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』 和泉書院.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』 くろしお出版.
- 長谷川信子 (1997) 「日本語の構造—情報単位としての文— ④ 発話行為と談話 (2)」 『月刊言語』 大修館書店.
- 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける『無助詞』の機能」 『日本語教育』 80. 158-168.
- ハドソン遠藤陸子・近藤純子・榎原芳美 (2005) 「無助詞の主題・主語・目的語」 『言語学と日本語教育IV』 25-36. くろしお出版.
- 林博司・水口志乃扶・小川暁夫 (2005) 「項の『文的』解釈と『発話的』解釈—呼びかけ詞の対称言語学的考察」 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』 253-288. ひつじ書房.
- 東出朋 (2015) 「日本語の呼びかけ語の機能—会話管理の観点から—」 地球社会統合科学研究 3. 1-14. 九州大学.
- 東出朋・松村瑞子 (2016) 「呼びかけ語の二人称対称人称詞—談話における特殊な機能を中心に—」 言語文化論究 37. 37-50. 九州大学.
- 堀川智也 (2010) 「『題目語』と『呼びかけ』の関係」 大阪大学世界言語研究センター論集 2. 19-33.

前原かおる (2000) 「呼びかけ語の特徴—題目との接近可能性—」 広島大学日本語教育学科紀要 10. 57-64.

丸山直子 (1995) 「話しことばにおける無助詞格成分の格」 計量国語学 19 (8). 365-380.

泉子・K・メイナード (2000) 『情意の言語学「場交渉論」と日本語表現のパトス』 くろしお出版.

山田剛一・中川裕志 (1995) 「助詞・ゼロ助詞・無助詞」 電子情報通信学会技術研究報告. NLC, 言語理解とコミュニケーション 95 (429). 31-38. 一般社団法人電子情報通信学会.

山田剛一・中川裕志 (1996) 「無助詞の意味解析を目指して」 情報処理学会研究報告, 自然言語処理研究会報告 96 (56). 81-88.

Lansisalmi, Riikka (1997) “Free forms of address(vocatives) in Japanese – a Finnish point of view –”, 『日本語研究センター報告』 4. 87-104. 大阪樟蔭女子大学.

#### 参考ページ

森川信夫 「おもしろくてためになる山口弁よもやま話

<http://www.ysn21.jp/furusato/yomoyama/text29.html> [2016年3月アクセス].

落語はろー 「大山詣り」 <http://www.asahi-net.or.jp/~ee4y-nsn/rakugo/HRS0104.htm> [2016年3月アクセス].

Wikipedia 「佐賀弁」 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BD%90%E8%B3%80%E5%BC%81> [2016年3月アクセス].

Wikipedia 「山口弁」 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E5%8F%A3%E5%BC%81> [2016年3月アクセス].

添付資料

表1. データ一覧

資料番号	資料名
1	因京子・松村瑞子（編）(2007)『平成十九年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
2	松村瑞子・趙海城（編）(2008)『平成二十年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
3	松村瑞子・王萌（編）(2009)『平成二十一年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
4	松村瑞子・李曦曦（編）(2010)『平成二十二年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
5	松村瑞子・李曦曦（編）(2011)『平成二十三年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
6	松村瑞子・李曦曦（編）(2012)『平成二十四年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
7	松村瑞子・王丹丹（編）(2013)『平成二十五年度日本語会話資料集』 九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
8-1	現代日本語研究会（編）(2004)『男性のことば・職場編』ひつじ書房『女性のことば・職場編』
8-2	現代日本語研究会（編）(2004)『男性のことば・職場編』ひつじ書房『男性のことば・職場編』
9	李麗燕(2000)『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』くろしお出版
10	山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
11	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』奥寺佐渡子(2006)「時をかける少女」
12	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』小林聖太郎・吉川菜美(2006)「かぞくのひけつ」
13	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』李相日・羽原大介(2006)「フラガール」
14	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』森義隆(2008)「ひゃくはち」
15	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』向井康介(2008)「俺たちに明日はないッス」
16	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』宇治田隆史(2008)「ノン子36歳（家事手伝い）」
17	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』斎藤ひろし(2009)「余命1ヶ月の花嫁」
18	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』西川美和(2009)「ディア・ドクター」
19	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』荒井晴彦・井上淳一(2010)「パートナーズ」
20	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』真辺克彦(2011)「毎日かあさん」
21	シナリオ作家協会（編）『年鑑代表シナリオ集』大根仁(2011)「モテキ」

## The Vocative and Orientedness Toward Hearer

Tomo HIGASHIDE

This paper focuses on the integrated explanation about various explicit uses of the Japanese vocative in discourse, from the perspective of orientedness toward hearer. Specifically, we pointed out two characteristic uses of the vocative in discourse: double-use and use as a filler. These uses are also placed on the scale of orientedness toward hearer, one as having a very strong alignment to this scale, the other very weak.

Keywords: vocative, orientedness, discourse